

Title	冬夜漫談
Author(s)	浅野, 英之助
Citation	天界 = The heavens (1929), 10(105): 60-62
Issue Date	1929-11-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/161492">http://hdl.handle.net/2433/161492</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 冬 夜 漫 談

浅野 英之助

今年は巳年である。安珍のかくれてゐる釣鐘を清姫の蛇がしめつけた様に、地球はじわじわこしめつけられてゆく。堅い皮が縮めばひゅがいくより仕方がない。ひゅからは火が噴き出す。噴いてはちゅみ、止んではちゅむ。そのうちに潰れても餡の出ない塊になつてしまう。それ迄には人類の寿命は終つてゐるに違いない。さうにかして防けないものか――。

自然と人生。これには二つの見方がある。人生を主としたもの、自然を主としたもの、我々が望遠鏡を覗いて星を見た時には、自然から人生を見る。間違いかも知れないが、人生を十字の蜘蛛糸ほごにも思はない。が、仰いで星空を見た時、そこに人生の偉大さを痛感する。

文化八年頃の俳人一茶の句に、

人並や芒もさわぐはゝき星

こいふのがある。前書きには「七月二十六日こゝより北方七星の邊りに稻つかねたらんやうなる星現る。老人豊秋のしるしこいふ」もある。文化八年は西暦千八百十一年である。

文政二年(千八百十九年)には皆既月蝕の句がある。

月蝕皆既 亥の七刻右方より鉄子  
六刻甚く丑の五刻左終

人数は月より先へ缺にけり

人の世は月もなやませ給ひけり

潜上に月の缺るを目利かな

酒盡きてしんの坐につく月見かな

この句の前には、「十五夜は高井野梨本氏にありて」の題書のもこに月見の句が一句ある。昔から月見は八月十五日に決つてゐる。だから月蝕は八月十六日にあつたのだと思はれる。亥は午後十時、子は午前零時、丑は午前二時である。各々の間隔は二時である、その一時を四刻に分つ、但し季節

で多少違ひはするが、ついでに月見の句を一つ、

名月や女だてらの頬かむり

以來、明治大正に進んで、我々が會員になつた頃より、こゝ二三年の普及はすさまじいものがある。勿論、山本先生始め幹部諸先生方の御盡力の賜である。以前はさうだつたらう、星を見てゐれば「運勢判斷手の筋いー」ミタ暗に叫んでゐる横丁の先生に間違へられてゐた。それほごでなくとも、星を見て何になる人々は笑ふ。自分がかつて黒點觀望を公開したことがある。漸く、黒點がやかましく新聞等へ書き立てられだした頃だつたので一時は望遠鏡の前に行列を作つた。爺さんご婆さん、杖をつくほごでもないが女の子を抱き上げて「これお君や、見えるかへ……誠にごうもハイ、有難うございました先生様、日輪様の黒子を生れて初めて拜見しました。有難いところでございます、子や孫の代までの残りになります、ハイ。」笑はふと思つても笑へないでせう、皆さん。

所が今日は進んだものである。が、目的はまだまだ遠い。大都の大新聞さへ、以前程ではないが、記事が出てゐるこ一つ二つごこ間違つてゐる。丁抹に於て彗星發見、南阿ミ丁抹を間違へてゐるのだ。コペンハーゲンから電報がきたからだらう。が、記事も多くなつたし内容も正しくなつた。而し地方は又聞きだから實に出たらめである。書くものは遊星ご惑星は別箇のものだと思つてゐる。思はず吹出される。これが一般人の頭には入るのだ。たまつたものでない。そこで吾々「天界生」の責任は重い。

近來種々の寫眞機が流行する。むろん寫眞術が發達したからである。東大航空研究所の栖原博士が發明した高速度寫眞機は毎秒二萬枚の寫眞が撮れる。あの目に見えないプロペラが、水のきれた時の水車のようにグルリグルリご廻る。これを逆にした寫眞も撮れる。だから月や遊星等の一年間の運行が二三分ですんでしもうに違ひない。彗星なご見てゐるうちに現れて消へるだらう。全天が撮れる様になれば怪物のようなツアイスのブラネタリウムは不用になる。前者高速度寫眞をあちらでは Slow movie ごいひ、後者を Fast movie ごいふ、映寫速度をいふからである。

人は誰れしも偉くならうごする、偉くなるには相手を打ち敗かさなければ

ばならない。人生は争鬭である。昔は群と群が争つた、その前には人々が争つたに違いない。次には城と城が、次には國と國、遂に國家と國家が争つた、現今がそうである。これを引延ばすに其の次には洲と洲との争ひになる、現今其の兆がある。次にはさうなる。近い所で火星が相手だ。月は家來である。地球の行く方についてくるから問題にならない。所が火星は大敵である。じつとしてゐれば地球を攻め取りに来るかも知れない。

宇宙は新陳代謝をする。古生代に驚くべき隆盛を極めたものが中生代には亡んでゐる。さしに地球を我が物顔にしたであらう爬虫類も現代ははじめのものである。亡んだものの中からでも秀れたものは生残つてゐる。人類も高等なものが生存權をもつ。火星は地球よりもづつこさめてゐる。つまり新生代の次の次の代位である。だから、自然は脱線がきらいだ。すると、地球の生物が例外でない以上、順當に進んで火星にも哺乳類が發達したとしても差支へあるまい。すると、火星の人類は隆盛を極めてしまつて現在ゐるにしても極く少數に違いない。文化は極度に發達してゐても。が、しかし、次のX類が現れて、より秀れたものだつたら？ まだ地球を攻めにこないから大したものはないと見ていゝ。星そのものも亡びつゝあるのだから。それで、地球が攻めてゆくに亡びつゝあるものは敗けるに決つてゐる。敗かして見た所でこつちもやがて亡んでゆく。まづ百年や千年の話でないから御心配に及ばない。だが人類は永久に榮えたいものだ。

冬の夜空はきれいだである。英雄オリオンの光が美しい。研ぎすました鎌のやうな月が枯木の枝にかゝつてゐる。寂しして一聲もない。

(一九二九、一)

## お 知 ら せ

今後、當支部例會は第二土曜日の夕食後早々(6時30分)に定めますから、左様御承知を願ひます。

天文同好會神戸支部幹事 改發香鳴